

米国農務省穀物等需給報告(2022 年 12 月 9 日発表のポイント)

令和 4 年 12 月 12 日
大臣官房政策課食料安全保障室

米国農務省は、12 月 9 日(現地時間)、2022/23 年度の 8 回目の世界及び主要国の穀物・大豆に関する需給見通しを発表した。その概要は以下のとおり。
－2022/23 年度の穀物の生産量は消費量を下回る見込み

1. 世界の穀物全体の需給の概要(見込み)

(※ ↑ ↓ は前月見通しからの増減)

- ① 生産量: 27 億 3,748 万トン(対前年度比 2.1%減) ↓
- ② 消費量: 27 億 6,994 万トン(対前年度比 1.3%減) ↓
- ③ 期末在庫量: 7 億 6,024 万トン(対前年度比 4.1%減) ↓
期末在庫率: 27.4%(対前年度差 0.8 ポイント減) ↓

【主な品目別の動向】

小麦 : 世界の生産量は、前月から下方修正されたものの、史上最高となる見通し。豪州で史上最高の生産見通しとなるものの、アルゼンチンで広範囲な乾燥の継続から収穫面積、単収とも前月から引き下げられ、2015/16 年度以来の低水準となり、カナダでも、生産量は史上 3 位ながらも、前月より引き下げられた。世界の消費量は、EU、ウクライナ等の飼料用その他需要量の引き下げにより前月から下方修正され、前年度を下回る見通し。世界の生産量は消費量を下回り、期末在庫量は前年度を下回る見通し。なお、米国の需給見通しは前月からの変更はない。一方、ウクライナの輸出量が前月から上方修正された。

- ① 生産量: 7 億 8,059 万トン(対前年度比 0.2%増) ↓ …ロシア、カナダ、カザフ等で増加、ウクライナ、アルゼンチン、インド、EU 等で減少(前月に比べアルゼンチンで下方修正、豪州で上方修正)
- ② 消費量: 7 億 8,953 万トン(対前年度比 0.5%減) ↓ …ロシア等で増加、インド、中国等で減少
- ③ 期末在庫量: 2 億 6,733 万トン(対前年度比 3.2%減) ↓ …ロシア、中国等で増加、インド、EU、米国等で減少
期末在庫率: 33.9%(対前年度差 1.0 ポイント減) ↑

とうもろこし : 世界の生産量は、ウクライナでの戦争の継続と秋の記録的な豪雨により収穫が遅れ、単収と収穫面積が引き下げられたこと等から、前月から下方修正され、前年度を下回る見通し。世界の消費量は、前年度より減少する見通し。世界の生産量は消費量を下回り、期末在庫量は前年度を下回る見通し。なお、米国の生産量の見通しは前月からの変更はないものの、輸出量が下方修正された。一方、ウクライナの輸出量は上方修正された。

- ① 生産量: 11 億 6,186 万トン(対前年度比 4.5%減) ↓ …ブラジル、アルゼンチン等で増加、米国、EU、ウクライナ等で減少(前月に比べウクライナで下方修正)
- ② 消費量: 11 億 7,055 万トン(対前年度比 2.6%減) ↓ …中国、ブラジル等で増加、米国、EU、ウクライナ、カナダ等で減少(前月に比べウクライナで下方修正)
- ③ 期末在庫量: 2 億 9,840 万トン(対前年度比 2.8%減) ↓ …ブラジル等で増加、米国、中国、EU 等で減少
(前月に比べウクライナで下方修正)
期末在庫率: 25.5%(対前年度差 0.05 ポイント減) ↓

コメ(精米) : 世界の生産量は、豪州や EU で生産量が引き下げられたこと等から、前月から下方修正され、前年度を下回る見通し。世界の生産量は消費量を下回り、期末在庫量は前年度を下回る見通し。

- ① 生産量: 5 億 327 万トン(対前年度比 2.3%減) ↓ …インド、パキスタン等で減少
- ② 消費量: 5 億 1,691 万トン(対前年度比 0.7%減) ↓ …インド等で減少
- ③ 期末在庫量: 1 億 6,864 万トン(対前年度比 7.5%減) ↓ …中国、インド等で減少
期末在庫率: 32.6%(対前年度差 2.4 ポイント減) ↓

2. 世界の大豆需給の概要(見込み)

世界の生産量は、インドやウクライナで生産量が引き上げられ、前月からわずかに上方修正され、ブラジルの増産などから前年度を上回り、史上最高となる見通し。世界の消費量は、中国等の需要増で前年度を上回る見通し。世界の生産量は消費量を上回り、期末在庫量は前年度を上回る見通し。なお、米国の需給見通しは前月からの変更はない。

- ① 生産量: 3 億 9,117 万トン(対前年度比 10.0%増) ↑ …ブラジル、パラグアイ、アルゼンチン、中国等で増加、米国等で減少
- ② 消費量: 3 億 8,088 万トン(対前年度比 4.8%増) ↑ …中国等で増加
- ③ 期末在庫量: 1 億 271 万トン(対前年度比 7.4%増) ↑ …ブラジル等で増加
期末在庫率: 27.0%(対前年度差 0.7 ポイント増) ↑

世界の穀物・大豆の需給動向

(米国農務省2022年12月9日発表)

【穀物】

(単位：百万トン)

項目	年度	2020/21	2021/22 (見込み)	(予想)	2022/23		(参 考) 2012/13
					前年度比 (期末在庫率は 「前年度差」)	前月差	
全体							
生産量		2,725.06	2,797.07	2,737.48	▲ 2.1%	▲ 8.4	2,295.7
消費量		2,741.74	2,805.36	2,769.94	▲ 1.3%	▲ 6.8	2,284.4
期末在庫量		800.98	792.70	760.24	▲ 4.1%	▲ 3.0	480.3
期末在庫率		29.2%	28.3%	27.4%	▲ 0.8	▲ 0.04	21.0%
小麦							
生産量		774.55	779.33	780.59	0.2%	▲ 2.1	660.5
消費量		782.42	793.40	789.53	▲ 0.5%	▲ 1.6	680.0
期末在庫量		290.34	276.27	267.33	▲ 3.2%	▲ 0.5	181.1
期末在庫率		37.1%	34.8%	33.9%	▲ 1.0	0.01	26.6%
粗粒穀物							
生産量		1,441.19	1,502.69	1,453.62	▲ 3.3%	▲ 5.9	1,159.1
消費量		1,455.84	1,491.17	1,463.50	▲ 1.9%	▲ 4.3	1,139.5
期末在庫量		322.63	334.14	324.27	▲ 3.0%	▲ 2.2	175.7
期末在庫率		22.2%	22.4%	22.2%	▲ 0.3	▲ 0.1	15.4%
とうもろこし							
生産量		1,129.20	1,216.87	1,161.86	▲ 4.5%	▲ 6.5	898.8
消費量		1,144.08	1,202.31	1,170.55	▲ 2.6%	▲ 4.8	877.4
期末在庫量		292.54	307.09	298.40	▲ 2.8%	▲ 2.4	144.8
期末在庫率		25.6%	25.5%	25.5%	▲ 0.05	▲ 0.1	16.5%
コメ(精米)							
生産量		509.32	515.05	503.27	▲ 2.3%	▲ 0.4	476.1
消費量		503.48	520.78	516.91	▲ 0.7%	▲ 0.9	464.9
期末在庫量		188.02	182.29	168.64	▲ 7.5%	▲ 0.4	123.5
期末在庫率		37.3%	35.0%	32.6%	▲ 2.4	▲ 0.02	26.6%

【大豆】

項目	年度	2020/21	2021/22 (見込み)	(予想)	2022/23		(参 考) 2012/13
					前年度比	前月差	
生産量		368.52	355.61	391.17	10.0%	0.6	269.1
消費量		363.76	363.38	380.88	4.8%	0.7	265.1
期末在庫量		100.03	95.59	102.71	7.4%	0.5	58.7
期末在庫率		27.5%	26.3%	27.0%	0.7	0.1	22.1%

資料：米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(December 9, 2022)

「Oilseeds: World Markets and Trade」、 「PS&D」

注：1) 穀物全体は、小麦、粗粒穀物、コメ(精米)の計。なお、各品目の計が全体の数値と合わない場合がある。

2) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

3) 期末在庫率(%) = 期末在庫量 × 100 / 消費量

4) 年度のとり方は、品目及び地域により異なる。[例えば、米国では、小麦(6～5月)、とうもろこし(9～8月)、コメ(8～7月)、大豆(9～8月)]

5) 在庫率の前年度比及び前月差の欄は、前年度及び前月発表とのポイント差。

なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合がある。

6) (参考) は、直近の価格高騰の原因となった2012/13年度の需給について掲載。

7) なお、「Oilseeds: World Markets and Trade」、 「PS&D」 については、公表された最新のデータを使用している。

米国の穀物・大豆の需給動向

(米国農務省2022年12月9日発表)

【穀物】

(単位：百万トン)

項目	年度	2020/21	2021/22 (見込み)	(予想)	2022/23		(参 考) 2012/13
					前年度比 (期末在庫率は 「前年度差」)	前月差	
全体							
生産量		429.86	448.60	414.89	▲ 7.5%	—	353.0
消費量		351.24	361.36	348.98	▲ 3.4%	0.6	317.1
輸 出 量		107.23	94.85	80.09	▲ 15.6%	▲ 2.5	51.6
期末在庫量		58.40	57.18	51.17	▲ 10.5%	2.0	44.2
期末在庫率		12.7%	12.5%	11.9%	▲ 0.6	0.5	12.0%
小麦							
生産量		49.75	44.80	44.90	0.2%	—	61.3
消費量		30.41	30.40	29.75	▲ 2.1%	—	37.8
輸 出 量		27.05	21.78	21.09	▲ 3.2%	—	27.5
期末在庫量		23.00	18.21	15.54	▲ 14.7%	—	19.5
期末在庫率		40.0%	34.9%	30.6%	▲ 4.3	—	29.9%
粗粒穀物							
生産量		372.89	397.71	364.77	▲ 8.3%	—	285.3
消費量		315.97	326.15	314.73	▲ 3.5%	0.6	275.5
輸 出 量		77.21	70.46	56.81	▲ 19.4%	▲ 2.4	20.7
期末在庫量		34.01	37.71	34.42	▲ 8.7%	1.9	23.5
期末在庫率		8.6%	9.5%	9.3%	▲ 0.2	0.6	7.9%
とうもろこし							
生産量		358.45	382.89	353.84	▲ 7.6%	—	273.2
消費量		306.69	317.12	305.45	▲ 3.7%	—	263.0
輸 出 量		69.78	62.78	52.71	▲ 16.0%	▲ 1.9	18.5
期末在庫量		31.36	34.98	31.93	▲ 8.7%	1.9	20.9
期末在庫率		8.3%	9.2%	8.9%	▲ 0.3	0.6	7.4%
コメ(精米)							
生産量		7.22	6.09	5.22	▲ 14.3%	—	6.3
消費量		4.86	4.81	4.51	▲ 6.2%	—	3.8
輸 出 量		2.97	2.61	2.19	▲ 16.1%	▲ 0.1	3.4
期末在庫量		1.39	1.26	1.21	▲ 4.0%	0.1	1.2
期末在庫率		17.8%	17.0%	18.1%	1.08	1.1	16.1%

【大豆】

項目	年度	2020/21	2021/22 (見込み)	(予想)	2022/23		(参 考) 2012/13
					前年度比	前月差	
生産量		114.75	121.53	118.27	▲ 2.7%	—	82.8
消費量		60.91	62.78	64.48	2.7%	—	48.6
輸 出 量		61.67	58.72	55.66	▲ 5.2%	—	36.1
期末在庫量		6.99	7.45	5.99	▲ 19.6%	—	3.8
期末在庫率		5.7%	6.1%	5.0%	▲ 1.1	—	4.5%

資料：米国農務省「World Agricultural Supply and Demand Estimates」(December 9, 2022)
「Oilseeds: World Markets and Trade」、「PS&D」

注：1) 穀物全体は、小麦、粗粒穀物、コメ(精米)の計。なお、各品目の計が全体の数値と合わない場合がある。

2) 小麦は、小麦及び小麦粉(小麦換算)の計。

3) 期末在庫率(%) = 期末在庫量 × 100 / (消費量 + 輸出力)

4) 年度のとり方は、品目及び地域により異なる。[例えば、米国では、小麦(6～5月)、とうもろこし(9～8月)、コメ(8～7月)、大豆(9～8月)]

5) 在庫率の前年度比及び前月差の欄は、前年度及び前月発表とのポイント差。
なお、表示単位以下の数値により計算しているため、表上では合わない場合がある。

6) (参考) は、直近の価格高騰の原因となった2012/13年度の需給について掲載。

7) なお、「Oilseeds: World Markets and Trade」、「PS&D」については、公表された最新のデータを使用している。

(参考 1)

世界の穀物等の価格動向 (2022 年)

● 小 麦 : 7.37 ドル/bu (前年同時期の価格 : 7.95 ドル/bu)

【価格は、シカゴ商品取引所における 2022 年 12 月第 1 週末のセツルメント価格。史上最高値 : 14.25 ドル/bu (2022 年 3 月 7 日)】

【1 月～9 月】

1 月に入り、米国中西部での寒波の影響懸念やウクライナ情勢の緊張から、1 月下旬に 8 ドル/bu 台前半に値を上げた。2 月中旬以降、ロシアのウクライナ侵攻による供給懸念等から上昇し、3 月 7 日には史上最高の 14.25 ドル/bu に値を上げたものの、3 月末の USDA 作付意向面積の増加等から、4 月初旬に 9 ドル/bu 台後半に値を下げた。

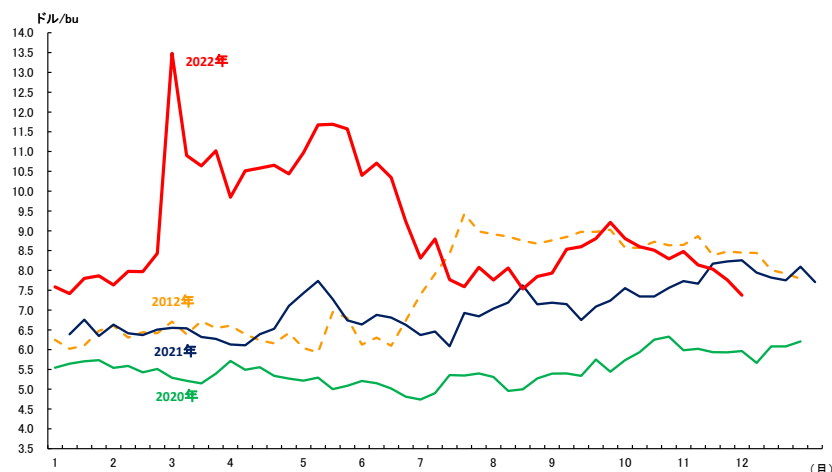
4 月中旬には、ロシアのウクライナ侵攻の深刻化による小麦供給懸念や、米国プレーンズの乾燥による米国産冬小麦への影響懸念等から 11 ドル/bu 台前半に上昇したものの、米国の低調な輸出等から 5 月初旬に 10 ドル/bu 台前半に値を下げた。その後、インドの輸出停止やウクライナ産の輸出停滞から、12 ドル/bu 台後半に値を上げたものの、国連のウクライナ産穀物輸出再開に向けた支援計画等から 10 ドル/bu 台後半に値を下げ、さらに 6 月に入り、米国や欧州での冬小麦の収穫進展、6 月末の USDA 面積調査での予想を上回る作付面積から値を下げ、7 月初旬には 7 ドル/bu 台後半に値を下げた。

7 月上旬には、EU での乾燥による生産減見込み等から 8 ドル/bu 台後半に値を上げたものの、各国の冬小麦の収穫の進展や、ウクライナ、トルコ、ロシア、国連でのウクライナ産穀物輸出再開に向けた合意への期待感等から 7 ドル/bu 台半ばから 8 ドル/bu 台前半で推移。

8 月に入り、ウクライナの黒海経由での輸出再開やその後のウクライナ産穀物の輸出進展から 8 月中旬に 7 ドル/bu 台前半まで値を下げたものの、8 月下旬以降、とうもろこし、大豆価格の上昇への追随や、ウクライナ産の黒海経由輸出に関するロシア側からの合意条件見直しの示唆や、ウクライナからの輸出の再懸念、米国の 9 月の四半期在庫量が市場予測を下回ったことから上昇し、9 月末に 9 ドル/bu 台前半に値を上げた。

【10 月、11 月】

10 月に入り、ウクライナ情勢の長期化によるウクライナ産の黒海経由での輸出の混乱懸念から 9 ドル/bu 台前半に値を上げたものの、ウクライナ産の黒海経由での輸出維持に向けた協議の見通し等から 8 ドル/bu 台前半に値を下げた。その後、10 月 29 日にロシアがウクライナ産の黒海経由での輸出合意を無期限で停止すると一方的に表明したことにより 11 月初旬に 8 ドル/bu 台後半に値を上げたものの、ロシアが輸出合意へ復帰し、さらに 11 月 17 日のウクライナからの穀物輸出再開に関する 4 者合意の 120 日間延長 (2023 年 3 月 19 日まで) の決定やドル高等から値を下げ、11 月末現在、7 ドル/bu 台後半で推移。



注: シカゴ商品取引所の各週末の期近価格(セツルメント)である。
グラフは、価格が高騰した2012年と直近3年の価格の推移。

● とうもろこし：6.35 ドル/bu （前年同時期の価格：5.86 ドル/bu）

【価格は、シカゴ商品取引所における 2022 年 12 月第 1 週末のセツルメント価格。史上最高値：8.31 ドル/bu(2012 年 8 月 21 日)】

【1 月～9 月】

1 月は、南米の乾燥懸念に支えられ 6 ドル/bu 台前半で推移。2 月以降、ロシアのウクライナ侵攻やラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥による減産懸念、原油価格の上昇等から 3 月初旬に 7 ドル/bu 台半ばに値を上げた。その後も、市場予想を下回る USDA 作付意向面積、ロシアによるウクライナ侵攻の深刻化、米国中西部の低温や雨がちな天候による作付け遅れ、原油価格の高止まり等から 4 月下旬に 8 ドル/bu 台前半に値を上げた。

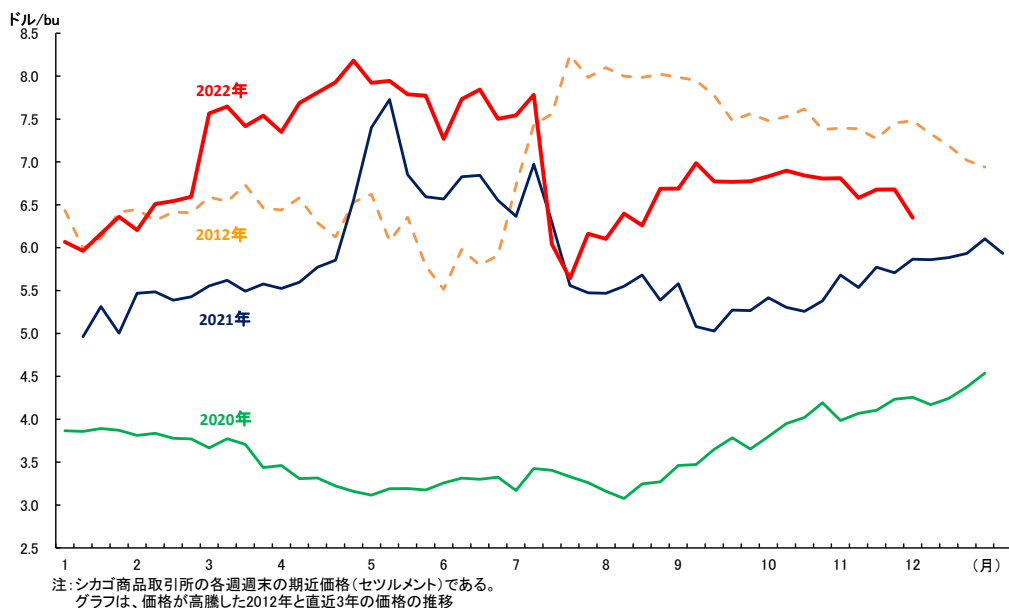
5 月に入り、天候改善による米国中西部の遅れていた作付けの加速や、国連のウクライナ産穀物輸出再開に向けた支援計画等から 7 ドル/bu 台半ばに緩やかに値を下げたものの、6 月半ばに、ロシアのウクライナ侵攻の継続、原油価格の高止まり、堅調なエタノール生産から 7 ドル/bu 台後半に値を上げた。その後、6 月末の USDA 面積調査での予想を上回る作付面積等から、7 ドル/bu 台半ばに値を下げた。

7 月に入り、米国中西部の高温・乾燥に伴う作柄悪化懸念等から 7 月上旬に 7 ドル/bu 台後半に値を上げた。7 月下旬にかけては、米国中西部の一部での降雨予報やウクライナ産穀物輸出再開に向けた 4 者合意への期待感等から 5 ドル/bu 台半ばに大幅に値を下げた。

9 月中旬にかけ、米国中西部の高温・乾燥懸念やドル安の進行、EU 及び米国での高温・乾燥による作柄悪化懸念、USDA の 9 月需給報告での市場予想を上回る米国生産量の下修正等から上昇し、9 月中旬には 7 ドル/bu 台前半に値を上げた。その後、世界的な景気後退懸念や米国で収穫の進展等から値を下げたが、9 月の米国の四半期在庫量が市場予測を下回ったことから 6 ドル/bu 台後半に値を上げた。

【10 月、11 月】

10 月に入り、10 月中旬にウクライナ情勢の長期化によるウクライナ産の黒海経由での輸出の混乱懸念から、一時 7 ドル/bu 近くまで値を上げた。米国の期末在庫は低水準であるものの、収穫の進展、ミシシッピ川の水位低下による米国産の輸出競争力低下、世界的な景気減速懸念、10 月 29 日にロシアがウクライナ産の黒海経由での輸出合意を無期限で停止すると一方的に表明したこと等から 6 ドル/bu 台後半で推移。その後、ロシアが輸出合意へ復帰し、さらに 11 月 17 日のウクライナからの穀物輸出再開に関する 4 者合意の 120 日間延長(2023 年 3 月 19 日まで)の決定やドル高から値を下げ、11 月末現在、6 ドル/bu 台後半で推移。



● コ メ : 474 ドル/トン (前年同時期の価格 : 413 ドル/トン)

【価格は、タイ国家貿易取引委員会における 2022 年 12 月第 1 水曜日の FOB 価格。史上最高値 : 1,038 ドル/トン(2008 年 5 月 21 日)】

【1 月～9 月】

1 月は、アフリカを始めとした国際市場におけるタイ米への強い需要等から 450 ドル/トン台前半に値を上げたものの、2 月は、旧正月の休暇期間などによる需要の減少、パーツ高により海外からの需要が減少したことで 430 ドル/トン台半ばに値を下げた。3 月は、ロシアのウクライナ侵攻が深刻化する中でも、ほぼ横ばいで推移したものの、3 月下旬からアフリカ諸国や中東からの需要により 440 ドル/トン台前半に値を上げた。

4 月は、イラクからの需要で 450 ドル/トン前後に値を上げ、5 月には、継続するイラク等からの強い需要により 480 ドル/トン台前半に値を上げた。その後、インド産等との価格競争により値を下げたものの、中東諸国からの需要により再び 480 ドル/トン台前半に値を上げた。6 月は、2017 年以來のパーツ安に加え、イラクやアフリカ諸国からの需要が低下したことから、440 ドル/トン前後に値を下げた。

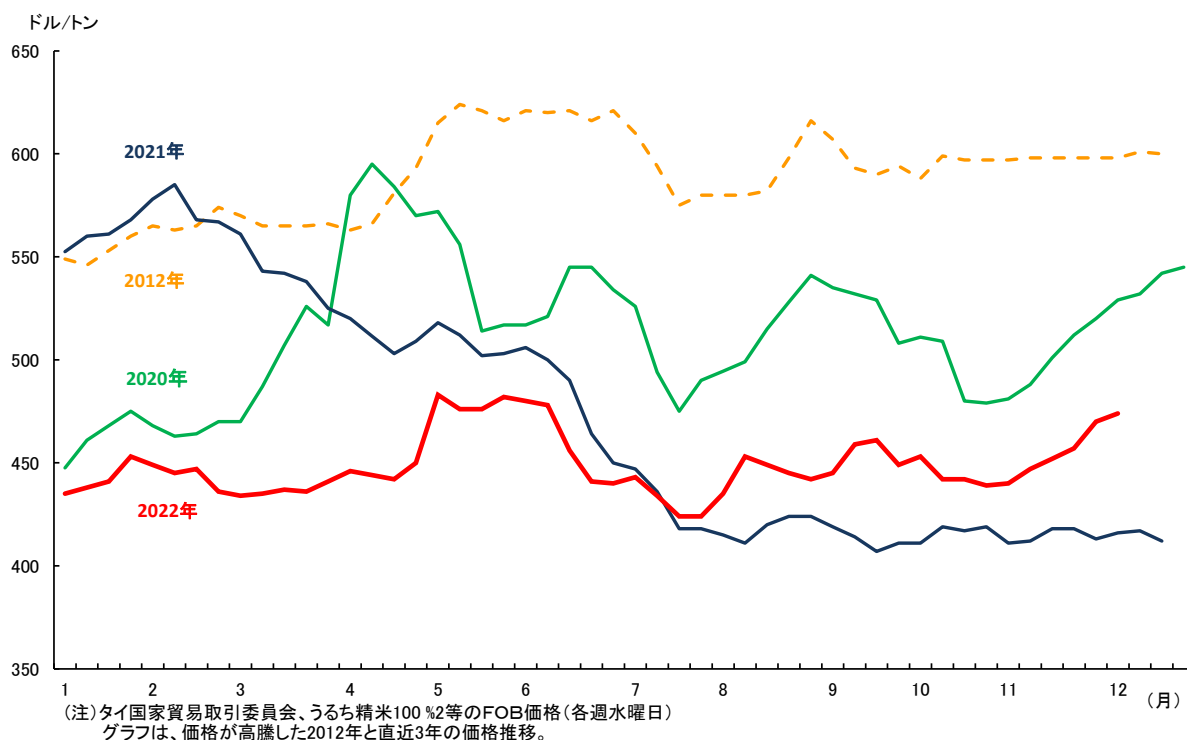
7 月は、パーツ安に転じたことや、乾季作の新穀が市場に流通し国内価格が低下したこと、ベトナム産に対して価格競争力があるものの、新規需要が軟調なことから 420 ドル/トン台半ばに値を下げた。

8 月は、タイ国内の堅調な需要に加え、中東等からの新規需要等から、一時 450 ドル/トン台前半に値を上げたものの、軟調な需要により 440 ドル/トン台前半に値を下げた。

9 月は、パキスタンの洪水による被害や、インドの輸出規制(碎米輸出禁止と一部精米の 20% 輸出税賦課)から 460 ドル/トン台前半に値を上げたものの、タイのパーツ安や軟調な国際需要により 450 ドル/トン前後に値を下げた。

【10 月、11 月】

10 月は、パーツ高により、一時 450 ドル/トン台前半まで値を上げたものの、その後のパーツ安や新穀の供給開始から 440 ドル/トンに値を下げた。11 月に入り、タイ米について、急速なパーツ高や、ベトナム産に比べ価格競争力があることから需要が増加し、11 月下旬現在、470 ドル/トンで推移。



● 大 豆：14.39 ドル/bu（前年同時期の価格：12.67 ドル/bu）

【価格は、シカゴ商品取引所における 2022 年 12 月第 1 週末のセツルメント価格。史上最高値：17.71 ドル/bu(2012 年 9 月 4 日)】

【1 月～9 月】

1 月中旬以降、ラニーニャ現象に伴う南米の高温・乾燥懸念や、その後の乾燥による南米の生産量の減少見通し、ウクライナ情勢の緊張の中、南米の高温・乾燥によるさらなる減産懸念や、植物油価格全体の上昇等から、3 月初旬に 17 ドル/bu 台前後に値を上げた。

4 月初旬には、市場予想を上回る USDA 作付意向面積等から 15 ドル/bu 台後半に値を下げたものの、ブラジルの高温・乾燥による減産やロシアのウクライナ侵攻の深刻化、植物油価格上昇等から、4 月下旬に 17 ドル/bu 台半ばに値を上げた。その後、コロナ感染に伴うロックダウンによる中国の需要低迷懸念等から、5 月上旬に 16 ドル/bu 台前半に値を下げたものの、5 月中旬以降、米国の中国向けを中心とした好調な大豆輸出、ロシアのウクライナ侵攻の継続や、植物油価格の高止まり等から再び値を上げ、さらに 6 月上旬に、中国のロックダウンの解除、大豆の堅調な国内需要や原油相場の上昇等から 17.69 ドル/bu と 2012 年 9 月の史上最高値に迫る水準に値を上げた。

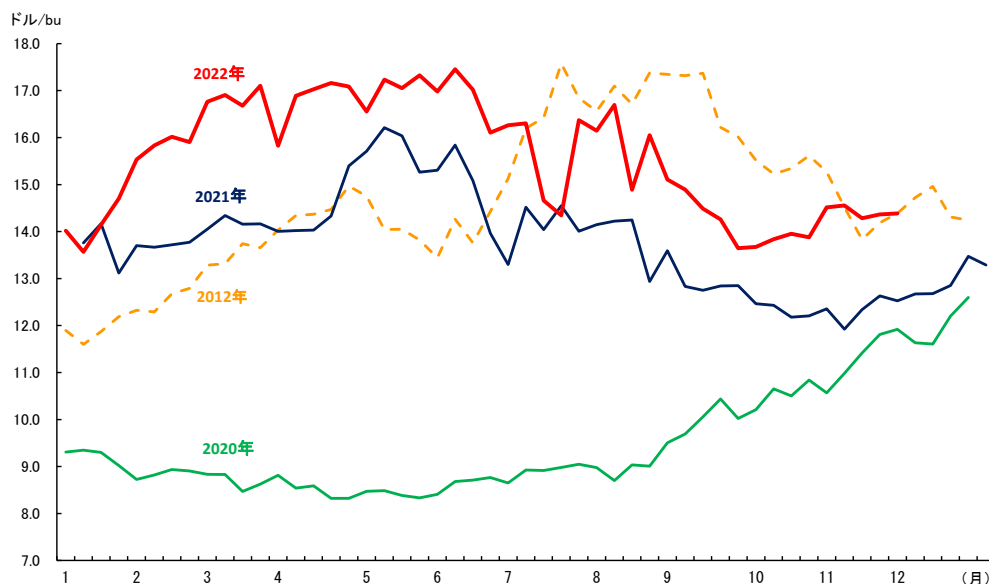
6 月中旬以降、予想を下回る米国産の作柄評価や USDA 面積調査、7 月の株式相場や原油価格の上昇等で一時値を上げたものの、中国需要の伸び悩み懸念や欧米の経済減速懸念、米国中西部の一部での降雨予報から 7 月下旬に 14 ドル/bu 台前半に大幅に値を下げた。

8 月上旬には、米国中西部の高温・乾燥懸念、ドル安等から、17 ドル/bu 前後に値を上げたものの、8 月中旬に、米国中西部の降雨予報等から 14 ドル/bu 台半ばに値を下げた。その後、米国の高温・乾燥による作柄悪化懸念から 8 月下旬に 16 ドル/bu 前後に値を上げたものの、米国の着莢期に適した天候予報、中国の景気減速等から 14 ドル/bu 台半ばまで値を下げた。

9 月中旬には USDA の 9 月需給報告での市場予想を上回る米国生産量の下方修正等から一時値を上げたものの、世界的な景気後退懸念や米国での収穫の進展、米国の四半期在庫量が市場予測を上回ったこと等から 9 月下旬に 13 ドル/bu 台後半に値を下げた。

【10 月、11 月】

10 月に入り、10 月中旬に USDA の 10 月需給報告で米国の生産量が市場予想に反して下方修正されたこと等から、10 月中旬に一時 14 ドル/bu 近くまで値を上げた。その後は、収穫の進展、ミシシッピ川の水位低下による米国産の輸出競争力低下、世界的な景気減速懸念等も米国の低水準の期末在庫量、11 月当初のブラジルのトラック運転手等による道路封鎖等から値が小幅に上下し、11 月末現在、14 ドル/bu 台後半で推移。



注：シカゴ商品取引所の各週週末の期近価格(セツルメント)である。
グラフは、価格が高騰した2012年と直近3年の価格の推移。

(参考2)

1 為替レート(対ドル円相場)

単位:円/ドル

2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
103.39	93.61	87.75	79.76	79.79	97.71	105.79	121.09	108.77	112.13	110.41
2019年	2020年	2021年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
108.99	106.78	103.70	105.36	108.65	109.13	109.19	110.11	110.29	109.84	110.17
10月	11月	12月	2022年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
113.10	114.13	113.87	114.83	115.20	118.51	126.04	128.78	133.86	136.63	135.24
9月	10月	11月	12月	2023年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
143.14	147.01	142.44								

出典：為替相場(東京インターバンク相場) 東京市場、中心相場 スポット・レート
 日本銀行: 主要時系列統計データ表 <http://www.stat-search.boj.or.jp/>
 年別は、日次データの平均値。月別は、月次データの月中平均。

2 海上運賃(フレート)

単位:ドル/トン

2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
93.65	50.71	63.59	54.88	49.18	46.63	44.35	30.30	27.92	38.48	46.42
2019年	2020年	2021年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
45.01	52.10	46.28	52.33	55.71	56.55	61.85	69.35	81.39	77.18	77.99
10月	11月	12月	2022年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
80.26	66.15	64.43	60.23	58.96	69.99	71.65	73.90	70.12	61.28	55.02
9月	10月	11月	12月	2023年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
51.90	56.61	49.34								

出典：米国(ガルフ)ー日本間、Heavy Grains, 50,000トン以上
 国際穀物理事会(International Grains Council); Ocean Freight Rates, 「World Grain Statistics」, 「IGC Grain Market Indicators」
 年別は月別データの平均値。月別は、毎日価格の平均値。

3 原油価格(WTI: 米国ウエスト・テキサス・インターミディエート)

単位:ドル/バレル

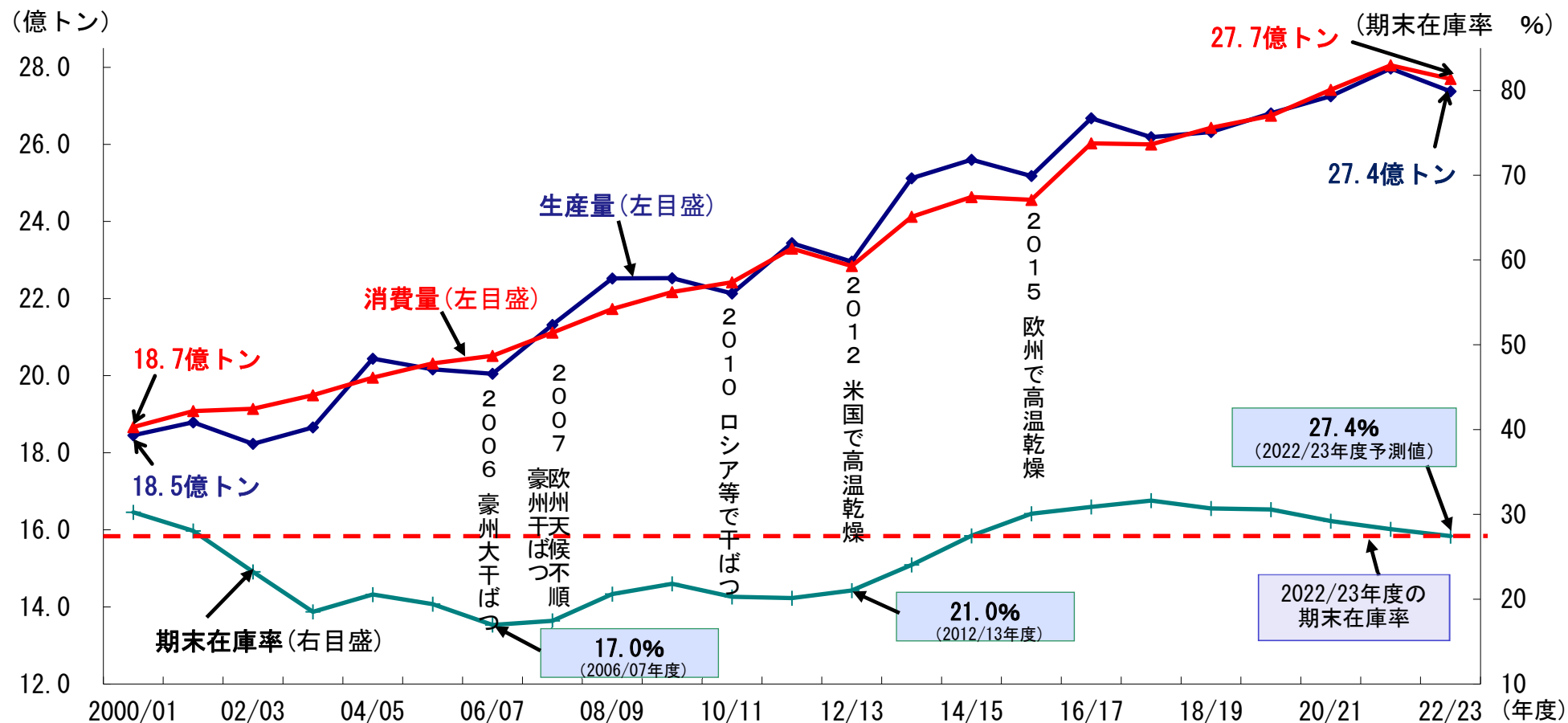
2008年	2009年	2010年	2011年	2012年	2013年	2014年	2015年	2016年	2017年	2018年
99.65	61.80	79.53	95.12	94.21	97.97	93.00	48.80	43.32	50.95	64.77
2019年	2020年	2021年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
57.03	39.40	52.10	59.06	62.36	61.69	65.16	71.35	72.43	67.71	71.54
10月	11月	12月	2022年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月
81.22	78.65	71.69	82.98	91.63	108.26	101.64	109.26	114.34	99.38	91.48
9月	10月	11月	12月	2023年 1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月
83.80	87.03	80.54								

出典：内閣府経済財政分析統括官付海外担当「海外経済データ -月次アップデート-」令和4年11月, 124頁
 但し、2022年11月 は、米国エネルギー情報局(U.S. Energy Information Administration)「Weekly Petroleum Status Report」の日次データの平均値

穀物の生産量、消費量、期末在庫率の推移

- 世界の穀物消費量は、途上国の人口増、所得水準の向上等に伴い増加傾向で推移。2022/23年度は、2000/01年度に比べ1.5倍の水準に増加。一方、生産量は、主に単収の伸びにより消費量の増加に対応している。
- 2022/23年度の期末在庫率は、生産量が消費量を下回り、前年度より低下し、27.4%。直近の価格高騰年の2012/13年度(21.0%)を上回る見込み。

□ 穀物(コメ、とうもろこし、小麦、大麦等)の需給の推移



資料: USDA 「World Agricultural Supply and Demand Estimates」 (December 2022)、「PS&D」

(注) なお、「PS&D」については、最新の公表データを使用している。